



安全使用上の注意



- 眼に入らないように注意。眼に入った場合は直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける(刺激性)
- 使用時は、農薬用マスク、手袋、長ズボン・長袖作業衣などを着用する。作業後は手足、顔などを石鹸でよく洗い、うがいするとともに洗顔する。
- 公園、堤とうなどで使用する場合、使用区域に縄囲いや立て札をたて、使用中および使用後(最小限その当日)に関係者以外は立ち入らせない。小児、人畜等に留意する。
- 使用残りの薬剤は必ず安全な場所に保管する。
- 火災時は、適切な保護具を着用し水・消火剤等で消火に努める。
- 漏出時は、保護具を着用し布・砂等に吸収させ回収する。
- 移送取扱いは、ていねいに行う。



効果・薬害等の注意

- 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきる。
- グリホサートを含む農薬であるので、他のグリホサートを含む農薬の使用回数と合わせ、作物ごとの総使用回数の範囲内で使用する。
- 調製には濁った水は用いない(効果)
- 展着剤の加用は必要ない。
- 土壌中で速やかに不活性化するので、雑草の発生前処理効果はない。
- 雑草生育期(草丈30cm以下)に有効なので、時期を失しないように散布する。
- 散布前に雑草の地上部を刈り払わない(効果)
- 通常2~14日で効果が発現するので、誤って再散布しない。
- 処理後6時間以内の降雨は効果を低下させることがあるので、天候を良く見極めてから散布する。
- スギナには生育期を過ぎた時期での散布及び他雑草の中に埋没しているような条件では効果が劣る事があるので、適期にスギナにかかるように散布する。
- 少量散布の場合は、少量散布用ノズル(5~15ℓ/10aの場合は専用ノズル)を用いて、雑草の葉面に均一に散布する。
- 農作物や有用植物に薬液が付着すると、激しい薬害が生じるので、かからないように十分注意する。
- 特に生育期畦間散布に使用する場合には作物にかからないよう十分注意して散布する。
- 出芽前に使用する場合、作物の出芽後に散布すると薬害を生じるおそれがあるので、必ず出芽前に散布する。
- 水田への飛散、流入等により水稻に薬害を生じるので、十分注意する。
- 雑かん木に塗布処理を行う場合は、伐採後、直ちに切り口全面に直接塗布する。
- 注入処理における注意
 - ①クズには株頭にナタなどで傷をつけ、薬液がよくしみ込むように注入処理する。
 - ②落葉雑かん木には、樹幹の回りに等間隔にナタ目を入れ、薬液を注入処理する。
 - ③処理竹から15m以内に発生したたけのこを食用に供さない。また、縄囲いや立て札によりたけのこが採取されないようにする。
- 散布液の調製には合成樹脂の内層のない鋼鉄製(ステンレスを除く)の容器類は使用しない。なお散布液を調製した容器及び散布器具は、使用後十分に水洗いする。
- 使用量、使用時期、使用方法等を守る。適用作物群に属する作物又はその新品種に対しては、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用する。使用方法を厳守する。特に初めて使用する場合は、普及指導センター、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 土壌が流亡したり、くずれたりするおそれのある所では使用しない。
- 公園、堤とう等で使用する場合、特に以下のことに注意する。
 - ①水源池、養殖池等に本剤が飛散・流入しないよう十分に注意する。
 - ②散布器具、容器の洗浄水は河川等に流さず、容器、空袋等は環境に影響を与えないよう適切に処理する。

●**空容器(空ビン)は圃場などに放置せず、3回以上水洗し、適切に処理する。洗浄水はタンクに入れる。**

■注入処理・塗布処理

作物名	適用場所	適用雑草名	使用時期	希釈倍数	使用液量	本剤の使用回数	使用方法	グリホサートを含む農薬の総使用回数
樹木等	公園、堤とう 駐車場、道路 運動場、宅地 のり面 鉄道等	雑かん木	伐採直後	原液 又は 2倍液	切り口全体に 十分量を塗布	—	植栽地を除く樹木等の 周辺地に切株塗布処理	—
		落葉 雑かん木	5~10月		1mℓ/ヶ所 樹径 2~3 10cm以下 10~20cm 4~8 20cm以上 10		立木注入処理	
林木	林地	クズ	春期又は秋期	原液	1~2mℓ/株		株頭注入処理	
		竹類	夏~秋期		5~15mℓ/本		竹稈注入処理	
畑作物	林地 放置竹林 畑地							